

* 第二演習・2013年度・後期 * * * * *

S.Ashina

A. 第二演習予定 (同学年は五十音順)

・第三演習室：

・隔週2コマ → 1コマ1人

60分の発表+30分の質疑応答

担当者は資料を準備の上、発表。パワーポイント使用可。

・担当者

	担当者1	担当者2
10月24日	朴 鍾順	南 翔一朗
10月31日	渡部 和隆	金 香花
11月7日	谷塚 巖	洪 伊杓
11月14日	南 裕貴子	張 旋
11月28日	岡田 勇督	長原 尚子
12月5日	OD・書評	OD・書評
12月12日	OD・書評	OD・書評

B. 研究室関連

1. 研究室紀要の刊行：3月刊行

・第二演習での発表 → 論文、書評

2. 特別研究発表会：年2回、2014年1月9日（木）と2014年3月

・学会発表の予行+書評

・原則的には：大学院生全員が参加（博士後期課程だけでなく）

3. 予餞会：3月8日（土）？

C. その他

・飲み物の準備：担当M

数種類の飲み物を準備する（種類はMで相談）。紙コップあるいはマイ・コップ。

・2013年12月14日（土）：京都大学基督教学会・研究発表会。

・2014年3月の日本基督教学会・近畿支部会は、京都大学にて。

現代の思想状況における宗教研究の課題 —キリスト教研究の視点から—

<内容>

- 一 はじめに
- 二 現代の思想状況とキリスト教研究
- 三 「脳・心・宗教」問題圏
- 四 むすび

一 はじめに

「ネットワークする宗教研究」という主題が与えられたが、しばらくの時間、わたくし自身の研究テーマであるキリスト教研究とも関係づけながら、宗教研究ネットワークの動向についてお話してみたい。もちろん、これからの話は、キリスト教研究を中心とするものであり、わたくしがキリスト教研究についてカバーできる範囲も限られている。したがって、議論は限定されており、すべての論点について十分に配慮したものとなり得ないことを、最初にお断りしておきたい。

まず、わたくしの問題設定と話の概略をはじめに示しておこう。

ご存じのように、現在、大学をはじめ学的研究の現場では、ますます専門化が進展しつつある。専門領域が細かく細分化されることによって、キリスト教研究内部においてさえも相互理解が困難な状況にある。しかし、いかに専門化が進んだからと言って、一つの研究領域が隣接する諸研究分野との間に構築されたネットワークによって支えられていることは否定できない。その点から、過度の専門化は研究全般の陳腐化と衰退をまねく恐れがある。研究ネットワークの存在は宗教研究にとってもいわば生命線と言わねばならない。この「ネットワークとしての宗教研究」を論じるには、こうした宗教研究のネットワークがどのように生成してきたかについて、その歴史的経緯を念頭に置く必要がある。わたくしの話は、この歴史的経緯の確認からスタートする。

次に、わたくし自身の研究テーマに即して、宗教研究のネットワークの実例に目を向けることにしたい。ネットワークとしての宗教研究を論じるには、具体的な事例を取り上げることが必要だからである。取り上げられるのは、「脳・心・宗教」という問題領域にほかならない。わたくしは、これまで自然科学との連関に注目することによってキリスト教思想を研究してきたが、比較的最近関わったテーマから、「脳神経科学と宗教」という問題を取り上げ、宗教研究のネットワークを描きたい。

そして、以上のネットワークとしての宗教研究についての議論から展望される問題について若干の論点を取り上げ、結びとしたい。特に、宗教研究ネットワークの展開の基盤、あるいはネットワークの行方といった問題である。(この最後の部分は時間の関係から省略することになるかもしれない。)

二 現代の思想状況とキリスト教研究

1. 宗教研究をめぐる状況は時代とともに変遷する。わたしたちの現在の宗教研究も、近代あるいは近代以降(ポストモダンという表現もあり得るが)の知的状況の下で成立した

ものであり、今もその影響下にある。

2. 近代以降のキリスト教研究の二つの問題：

- ・宗教批判（フォイエエルバッハ、ニーチェ、マルクス、フロイト）、
批判されるべき宗教の典型としてキリスト教
- ・宗教的多元性
多様な宗教現象の広がりにはふさわしい宗教理解とキリスト教の位置づけ

↓

宗教概念、宗教批判、宗教多元性という三つの基本的問い

（芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年）

3. 「脳・心・宗教」、あるいは脳神経科学とキリスト教思想という問題連関を理解する上で参照すべきは、19世紀の宗教批判、特に19世紀後半以降の進化論論争とそこから得られる教訓であろう。

4. 進化論論争→「宗教と科学の対立図式」（特に、1880年代以降）

宗教研究のネットワーク形成に対する疎外要因。

進化論者と創造論者という両陣営の原理主義的論調。

5. ドーキンス、マクグラスの場合

<参考文献1>

1. 芦名定道「現代キリスト教思想と宗教批判—合理性の問題を中心に—」
（日本宗教学会『宗教研究』第82巻、357-2、2008年9月、227-249頁）。
2. リチャード・ドーキンス『神は妄想である——宗教との決別』早川書房、
2007年（2006）。
3. A・E・マクグラス『神は妄想か？ 無神論原理主義とドーキンスによる神の否定』
教文館、2012年（2007）。

三 「脳・心・宗教」問題圏

（1）脳科学と宗教—1980年代～2000年頃—

6. 1980年代以降、脳神経科学の進展（特に、fMRI（機能的磁気共鳴画像）などによる脳活動の画像化技術の開発） → 脳神経宗教学。
 7. リタ・カーターによる簡潔なまとめを参照しつつ、ジョン・ヒックが2006年に出版された著書で的確な論述を行っている（邦訳：ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うのか——宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館）。
- 「1 「パーシングのヘルメット」によるてんかん発作と前頭葉刺激は宗教的幻想の原因となる。
- 2 向精神薬はさまざまなかたちの宗教体験をもたらす。
 - 3 「純粹意識」、空、無、空性（シューニヤター）の意識は、知覚から取り込むすべての入力を切断したあとにも残存する意識が原因で生じる。
- 4 すべての実在との一体感は、個人の身体的な境界意識を遮断することで生じる。
 - 5 神の存在あるいはそのほかの超自然的な存在の感覚は、「自我システム」を二分

して一方が他方を別の実体と見るときに生じる。」

8. 自然主義の立場：様々なタイプの宗教経験が脳内の自然のプロセスによって生じる。

宗教経験とは「もっぱら妄想であると主張する重大な論拠」（ヒック、23）。

9. この問題状況に関して、次の二点を指摘。

1) 脳神経宗教学の議論における、原理主義的進化論者と類似の考えの反映。

「自然主義 対 宗教の対立図式」の枠組み

2) 「脳と心」という問題圏は、キリスト教を超えてすべての宗教に関連する（多くの宗教が共有する問題圏）。

宗教意識や宗教経験は「心」「魂」「霊」という場において成立するが、脳神経科学によってテーマ化されているのは、まさにこの心・魂・霊と脳との関係である。

「脳と心」から、諸宗教の比較あるいは宗教間の討論や対話へ。

10. fMRI について、その限界。

実は、脳機能画像は複雑なデータ処理を経て生成される。

- ・ fMRI は、活動自体ではなく神経活動に伴う血流量の変化を測定している。しかし、じかにニューロンが活動するとなぜ血流量が増加するかについては完全な解明がなされているわけではない（ブラックボックス）。

- ・ なにもしていないとき（静止状態）と活動時（活動状態）の二つの条件下での脳活動の比較、つまり、二条件間の引き算の結果が脳機能画像である。

- ・ しかも、測定誤差が存在するために、二条件下で何度も測定を繰り返し、統計処理（平均値と標準偏差を織り込む）を行ったものが、脳機能画像にほかならない。

↓

fMRI による研究によって分かるのは特定の活動と脳領域との統計的相関関係。

11. 現在の脳研究レベルによる議論によって、宗教理解が格段に深まると考えることは、あまりにも過度の期待と言わざるを得ない。「脳と心のかかわりを読み解くには、その道のりはまだまだ長い」（苧坂直行、2012、vii）のが現実である。

宗教研究者としては、脳神経科学の華々しい研究成果を前にして、一喜一憂する必要は、当面ないと思われる。

12. 宗教研究で扱われる宗教現象は、脳科学を含めた自然科学において通常行われているような人為的な実験室内の現象ではなく（fMRI による脳機能画像研究における被験者は、厳密にコントロールされた認知的課題を MRI という拘束度の高い装置内で行う）、個人と集団との様々な現実のダイナミズムにおいて生成するものだ。

（2）社会脳と宗教

13. 「単一の脳」から社会脳へ。

「ソーシャルブレインズとは」、「僕たちが社会の中で生き抜くために必須の脳の働き」と説明できます。「わたしたちの脳はけっして孤立していません。常に外部に開かれたオープンなシステムです。」（藤井、2010、4）

脳神経科学が紡ぎ出す研究のネットワークは着実に宗教研究へと近づいている。

14. 藤井直敬の研究より。

1) 社会脳研究の方法論

「神経細胞ネットワーク」と「社会ネットワーク」という二つの階層の区別と関連性。

人間理解：「人々が互いにつながることでその多層的なネットワークシステムを実現している」(55)。還元主義的な単純化を回避 (Spezio)、同時に、身体という境界面において接する質の異なる二つのネットワークの統合。「両者の間に共通するコミュニケーションプロトコルが存在」(56)しなければならない。

↓

「神経細胞から見たボトムアップ的な見方」と、「逆に社会からトップダウン的に見る」見方が可能になる(59)

・「多次元的生体情報記録手法」：「各個体の測定可能な生体情報を可能な限り同時に記録する一方で、環境情報も同時に記録」こと(172)を目指すものであり——「観察者である実験者も、観察対象を含むネットワークに属しており、立場を変えれば、自分自身の脳も研究対象となりうるからです」(192)——、具体的には、たとえば、「てんかん患者の外科的治療の術前探査のため」(174)に使用される「ECOG (Electrocorticogram) という電極を使う方法」が提案される。→ いかなる質のデータをどのようにして獲得するか。

2) 既存の研究からも社会脳研究へのアプローチ。

「自粛」という世論」(142)、「異様な愛国的キャンペーン」「意図的な大規模メディア操作」(143)、「社会的権威による強制力」(144)といった社会システムレベルの現象について、「ミルグラム実験」あるいは「スタンフォード監獄実験」として知られる実験からアプローチする。

「ミルグラム実験」：「被験者が、自分の行動の結果として他者を傷つけていることがわかっていながらも、それが権威者からの命令だとしたら断ることができるかどうかという実験」(148-149)であり、そこから得られた結果は、「権威が与える責任放棄と思考停止は、誰にでもいつでも起きうるもの」(151)ということ。

↓

「人の倫理観は絶対的なものではなく、そのときの社会状況に応じていかようにも変化し、権威付けがあるなら、何でもやりかねない」(155)、「わたしたちは、本質的にきわめて脆弱な倫理観と、無意味に保守的な傾向を持った生き物なのだ」(157)との人間理解。

3) 宗教研究、キリスト教思想研究の観点から。

藤井が示唆するリスペクト（「人が人に与える、母子関係に源を持つような無条件な存在肯定」208）の問題— Spezio は愛（アガペー）の問題として論じている—。

関係性という観点に基づく人間理解（人間は関係存在である）。社会脳は、「関係構造の変化に応じて、わたしたちのふるまいを適応的にコントロールしている脳のしくみ」(169)である。

↓

脳神経科学への期待・展望：人間の幸福あるいは喜びとは何かという問題。

「人の喜びや幸せは、個人の中にあるのではなく、むしろ他者との関係性の中にある」(198)「双方向的な社会的コミュニケーションが、わたしたちが生物として存続する必須の条件になっていると考える方が正しい気がします」(205)、「母親が与えてくれる関係」「存在そのものを無条件で認めるという態度」(206)が人間存在には不可欠であり、「リスペクト

の欠如が与える影響は短期間では出てこない」としても、「その欠如はボディブローのように社会を徐々に疲弊させる」(214)。 cf. ブーバーの対話論的な人間学

15. 「自己と他者を結ぶきずなどとしての社会意識がどのように脳内に表現されているのかを探る気の遠くなる作業は、まだはじまったばかりである」(苧坂、2012、i)。しかし、同時に、「この作業は実に魅力ある知的冒険でも」(ibid.) ある。

16. 脳科学あるいは社会脳から宗教研究ネットワークへ。

- ・「宗教と科学」関係論は、キリスト教を超えてすべての宗教へ広がることが可能になった。それにより、宗教間対話あるいは信仰間対話という問題が、心という問題領域において新たに展開可能になる。

- ・「社会脳と心」という観点から、心の専門領域であった心理学と社会現象を専門にする社会学とが統合的な理論構築に至るかもしれない(?)。

→宗教心理学と宗教社会学という宗教研究における二つの研究領域の新たな結びつき。

心理学者も社会学者も、「研究者は、それぞれのオリジナルのバックグラウンドに応じた異なるフレームを持って」(220)いるが、社会脳研究は、これらの異なる専門領域の研究者が「フレームを共有する準備から」開始されるのである(221)。

17. Michael L. Spezio, *Social Neuroscience and Theistic Evolution: Intersubjectivity, Love, and the social Sphere*, in: *Zygon*, vol.48.no.2 (June 2013), pp.428-438.

Abstract: After providing a brief overview of social neuroscience in the context of strong embodiment and the cognitive science, this paper addresses how perspectives from the field may inform how theological anthropology approaches the origins of human persons-in-community. An overview of the Social Brain Hypothesis and of simulation theory reveals a simultaneous potential for receptive/projective processes to facilitate social engagement and the need for intentional spontaneity in the form of a spiritual formation that moves beyond simulation to empathy and love. Finally, elements of a virtue science that draws on Dietrich Bonhoeffer's relational *imago Dei* are shown to be helpful in framing and motivating theological approaches to human origins.

<参考文献2>

4. 芦名定道「自然神学の新たなフロンティア——脳と心の問題領域」(京都大学基督教学会『基督教学研究』第27号、2007年12月、1-19頁)。
5. 芦名定道「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」(芦名定道・星川啓慈共編『脳科学は宗教を解明できるか?』春秋社、2012年8月)。
6. ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うのか——宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館、2011年(2006)。
7. 理化学研究所・脳科学総合研究センター『脳研究の最前線 上下』講談社ブルーバックス、2007年。
8. 藤井直敬『つながる脳』NTT出版、2009年、『ソーシャルブレインズ入門——〈社会脳〉って何だろう』講談社現代新書、2010年。
9. 千住淳『社会脳の発達』東京大学出版会、2012年。
10. 苧坂直行編『社会脳シリーズ』新曜社、2012年～。
『社会脳科学の展望——脳から社会を見る』

四 まとめ

今回のわたくしの発表では、ネットワークする宗教研究の新たな実験的ケースとしての「脳・心・宗教」という問題を取り上げた。近代以降、宗教研究ではさまざまな方法論、研究分野が登場し研究成果を蓄積しつつ現在にいたっている。諸研究分野は相互に協調的な関連づけを模索しつつ進展してきたが、進化論論争が象徴的に示すように、キリスト教研究の範囲においても、諸研究の多様性はしばしば激しい論争・対立・抗争を生み出してきた。こうしたこれまでの歴史をいわば教訓化しつつ、宗教研究は、いかなる創造的なネットワークを描くことができるのであろうか。また、このネットワークを具体化するために何が必要だろうか。これは、宗教研究に関わる研究者の共通の課題であり、それに答えるためには、強力な理論的基盤が必要である。最後に、この理論的基盤の構築に関連して、若干の指摘を行うことによって、わたくしの講演の締めくくりとしたい。

自然科学研究の急速な進展を念頭におきつつ宗教研究ネットワーク（宗教研究の内部と外部の双方に広がる）を構築する上で必要となるのは、宗教と科学の関係性をめぐる哲学的思索である。現代の多様に分岐した哲学思想の中で何が宗教と科学の関係理解の基礎理論となり得るかについては、様々な意見があると思うが（そもそも、そのような哲学思想を現代に見出しうるかも問題かもしれない。しかしギリシャ哲学の発端から現代に至るまで本来哲学とは、多岐に分岐した知のネットワーク構築の基礎論であったことは否定できない）、わたくしは、宗教哲学とは、本来このような役割を担う学問分野であると考えている（現在の宗教哲学研究者によってこうした問題意識がどの程度共有可能かは分からないが）。

キリスト教思想の最近の動向として自然神学の再構築（伝統特殊な普遍性・合理性）の動きが見られるが、これは、宗教と科学の関係論についての宗教哲学と表現してよい。なぜなら、自然神学とは、本来、キリスト教の成立以前に、哲学的な神論（宗教哲学に相当する）として古代ギリシャにおいて成立し、それが後にキリスト教的自然神学として展開したのだからである。この本来の意味における自然神学に戻るならば、それは宗教と科学の関係論の基礎を論じる宗教哲学として位置づけ直すことができるはずである。しかも、この自然神学（＝宗教哲学）の思索が諸宗教相互の関係論をも視野に入れたものとなり得ることは、先に、「脳・心・宗教」という問題が、「脳と心」をめぐる諸宗教の比較や対話に展開可能かもしれないと述べたことからもおわかりいただけるであろう。宗教と科学という問題領域が、宗教哲学的思索を基盤にして、多元的な宗教的状况の議論に接続される、ここに、ネットワークとして宗教研究の行方を展望することができるように思われる。

<参考文献3>

11. Eugene d'Aquili and Andrew B. Newberg, *The Mystical Mind. Probing the Biology of Religious Experience*, Fortress, 1999.
12. James H. Austin, M.D., *Zen and the Brain*, The MIT Press, 1999.
,Selfless Insight. Zen and the Meditative Transformations of Consciousness, The MIT

Press, 2009.

13. Patrick McNamara (ed.), *Where God and Science Meet. How Brain and Evolutionary Studies alter our Understanding of Religion*, Praeger, 2006.

Vol. One :Evolution, Genes, and the Religious Brain.

Vol. Two: The Neurology of Religious Experience.

Vol. Three: The Psychology of Religious Experience.